

42350

教科書文庫

4
815
42-1937
2000.0 64972

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

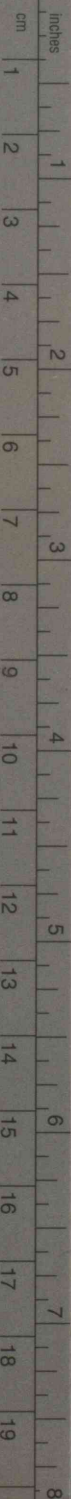


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
815  
42-1937  
2000064972

女子新國文典

上級用



教育部檢定  
高等女子學校國語科  
昭和二十年十一月二日

教科書文庫  
4  
815  
42-1937  
2000064972

資料室  
375.9  
Hi 18

廣島高等師範學校  
附屬中學校  
國語論文研究會著

# 女子新國文典

上級

用  
藏書  
版店經

広島大学図書  
2000064972

広島大学  
教  
64972  
圖書

## 例言

- 一 本書は昭和十二年三月改正の要目により、文語法を主とした文法を學習せしめる爲、女學校第二學年又は第三學年用の教科書として編纂したものである。
- 一 口語法と文語法との異同を知ることには、やがて我が國語の性質變遷を知ることになり、女學校に於ける文法學習上の重要な點であるから、混亂を來さないことを旨として、常に既習の口語文法との連絡を保ち、その異同をみづから發見させるが如き方法を取り得るやうに努めた。
- 一 文語活用語の活用形は、その各に就いての知識を要求することは出來ないのが實情であるが、出來る限り歸納的に學習し得るやう、例文を既習のものに採ることに努めた。



◎ 第八章 副詞……………三

◎ 第九章 接續詞……………三

◎ 第一〇章 感動詞……………七

第二篇 單語篇(下)……………元

◎ 第一章 文語動詞の活用形……………元

◎ 第二章 文語動詞の活用の種類……………三

一 四段活用……………三

二 上二段活用……………三

三 上一段活用……………三

四 下二段活用……………七

五 下一段活用……………六

六 カ行變格活用……………元

七 サ行變格活用……………元

◎ 第三章 文語動詞の識別法……………四

一 活用の種類を識別する法……………四

二 活用の假名遣を識別する法……………四

△ 第四章 文語形容詞の活用……………四

第五章 文語形容動詞の活用……………五

◎ 第六章 文語用言の音便……………七

一 動詞の音便……………七

二 形容詞の音便……………八

◎ 第七章 文語助動詞の種類及び活用……………六

一 受身の助動詞……………六

二 可能の助動詞……………六

三 使役の助動詞……………六

四 崇敬の助動詞……………三

五 打消の助動詞……………三

六 時の助動詞……………六

七 願望の助動詞……………六

八 推量の助動詞……………六

九 咏嘆の助動詞……………七

一〇 指定の助動詞……………七

一一 比況の助動詞……………七

第八章 文語助動詞の接續……………七

他の品詞と助動詞との接續……………七

一 受身(可能・崇敬)の助動詞……………七

二 可能の助動詞……………七

三 使役(崇敬)の助動詞……………七

四 崇敬の助動詞……………七

第九章 文語助詞の種類

助動詞相互の接續……………四

一〇 指定の助動詞……………三

一一 比況の助動詞……………三

九 咏嘆の助動詞……………三

八 推量の助動詞……………三

七 願望の助動詞……………三

六 時の助動詞……………三

五 打消の助動詞……………三

第九章 文語助詞の種類……………三

一 第一類……………三

二 第二類……………三

三 第三類……………三

第一〇章 注意すべき文語助詞の用法

はばもぞなむやかこそ  
しだにすらさへのみばかりなど  
ななそばやなむがなかなかも  
かしよやもな

一	に・へ	一〇六
二	ば	一〇六
三	とも	一〇七
四	ど・ども	一〇七
五	な・そ	一〇七
六	と	一〇九
七	だに・すら・さへ	一〇〇
八	ばや・なむ	一〇一
九	や・か	一〇一

一〇	係結の法則	一〇三
第一章	文語の接頭語・接尾語	一〇八
第二章	品詞の轉成	一一

第三篇 文章篇

第一章	文の成分	一一三
第二章	文の成分の位置及び省略	一一六

一	正常の場合	一一六
二	倒置の場合	一一六
三	省略の場合	一一九

第三章	節	一二三
第四章	主部・述部・補部・敘述部	一二六

第五章 文の種類 . . . . . 一四三

一 單 文 . . . . . 一四三

二 複 文 . . . . . 一四三

三 重 文 . . . . . 一四三

附 録

文法上許容ニ關スル事項

表

動詞活用表

形容詞活用表

形容動詞活用表

文語動詞活用識別表

文語動詞假名遣識別表

文語用言音便表

助動詞の種類・活用及び接續表

互人語があつても  
連語となる

女子新國文典 上級用

總 說

長閑なる春野山に充滿ちたり。

文 語  
文 語  
單 語

右の例のやうに、文章にのみ用ひる特別の國語を文語といふ。文語でも口語と同じく一つの纏つた思想を表してゐるものを文といひ、これを分解すると、右の傍線を施した部分のやうに、それぞれ一つの意味又は働をもつた單位の言葉即ち單語又は語に分れる。

長閑なる春野山に充滿ちたり。のやうに、幾つかの單語が集つて



連語  
品詞

一つの意味をなしてゐるものを連語といふ。單語は文語でも口語と同じくその意味・働・形等の上から次の十種に分け、その各を品詞といふ。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 形容動詞 助動詞  
助詞 副詞 接續詞 感動詞

第一篇 單語篇(上)

第一章 名詞

- 一 源氏物語は紫式部の著したる小説なり。
- 二 京都は我が國に於ける舊都なり。

名詞

固有名詞

普通名詞

三 我等は昭和の女性たり。  
右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名稱をいふ語を名詞といふ。

名詞の中、右の二重傍線を施した語のやうに、人名地名書名年號等をあらはす名詞を固有名詞といひ、一重傍線を施した語のやうに、一般の名詞を普通名詞といふ。

「太閤」「黃門」等は元來普通名詞であるが、それが特に「豊臣秀吉」「徳川光圀」等を指す場合は固有名詞である。

- 一 そなたの言はるゝところ尤なり。
- 二 まことに名残惜しきことなり。
- 三 心に浮かぶまゝを書けり。
- 四 亡き友の爲に花をさゝげん。

三人に語るべきものにもあらず。

右の例の傍線を施した語も亦名詞として取扱ふ。

數詞

名詞の中、「ひとつ」「五」「二分の一」「メートル」「三本」「四月一日」「第一番」のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶ。

練習題

次の文中から名詞を選び出し、其の種類をいへ。

- (1) 東大寺の金堂は、天空高く聳えて、五丈三尺の大佛千二百年の面影を残せり。
- (2) 桓武天皇の御時都を今の京都に遷されたり。
- (3) 天和元年に至りて、一切經六千九百五十六卷の大出版

は遂に完成せられたり。

(4) 松下禪尼は北條時頼の母なり。

(5) 花にも月にも、喜にも悲にも、まづ思ひ出で

らるゝは故郷なり。

(6) 歴史は長し七百年、興亡すでに夢に似て、英雄墓

は苦むしぬ。

(7) 月なほめなる時計臺、二つの針の重なりて、打つも

重しや時の數。

(8) 殿島は日本三景の一に數へられて名高し。

(9) 一切經は卷數幾千の多きに上り出版は容易の

事業にあらず。

(10) 人は食ふために働くにあらず、生きんが故の



第二章 代名詞

代名詞  
人代名詞  
指示代名詞

自稱  
對稱  
他稱  
不定稱

われ、汝、彼此、此處、其處、彼方などのやうに、人事物場所方向の名目の代りに使つてそれを指示する語を代名詞といふ。  
代名詞の中、人の名の代りに使はれるものを人代名詞といひ、事物場所方向を指示するものを指示代名詞いふ。

一 人代名詞

人代名詞は其の指示するものによつて、左の四つの稱に分ける。

- 自稱……自分を指す語
- 對稱……相手を指す語
- 他稱……第三者を指す語
- 不定稱……不定のものを指す語

近稱・中稱  
遠稱・不定稱

二 指示代名詞

指示代名詞は其の指示する事物場所方向の遠近によつて、近稱・中稱・遠稱・不定稱の四つの稱に分ける。

事物				
	こ	こ	そ	あれ
	これ	それ	あれ	いづれ
	か	あ	な	
	かれ	あれ	に	

方向		場所	
こ	こなた	ここ	あそこ
ち	そなた	そこ	いづこ
そ	あなた	かしこ	いづく
ち	あなた	いづく	いづかた
あ	あなた	いづく	
ち			
い			
づ			
ち			

この「そのかあ」のは本来代名詞「こそこあ」に助詞「が」が添うたものであるが、一語としてその下に來る體言を指すだけに用ひられる場合が多く、他の代名詞と稍意味の上に差のある場合がある。但し便宜上一代名詞として取扱つてよい。

名詞・代名詞を體言といふ。

練習題

次の文中から代名詞を選び出し、其の種類稱をいへ。

(1) わらは 此の 家に 参りし 時、父より 渡されしは

此の 金なり。

(2) 我若し 彼の 地にて 死したりと 聞かば、汝 必ず之  
を 持歸りて、日本 の 役所に 届出づべし。

(3) 彼方 此方 残る くまなく 探し求めき。

(4) 余は 親しく 彼等 の 崇嚴なる 數分間 の 問答を 聽け  
り。

(5) 諸姉よ、諸姉は われらを 心より 導き 給へり。

(6) 嗚呼、別れたる 我が 友、今 何處にか ある。

(7) 彼處に 行きて 彼の 畫師の する 様を見 給へ。

(8) 我は 此處に 我が 友と 相語り つゝ、今宵 一夜を  
あかささん。

- (9) 貴女には恙なくお暮しなされ候や。
- (10) 御身いかなる人にましますかや。
- (11) 僕足下の言を用ひず、此の失敗に陥る。あゝ誰をか恨み何をかとがめん。
- (12) それがしなほ一言あり、托げて聞きたまへ。
- (13) 汝は誰そ。何を何處にか負ひて行く。
- (14) かの殿は狩のかへるさに、工藤とかやに討たれ給ひぬ。
- (15) 人の馬にはおのれ乗り、おのれの馬には人乗れり。
- (16) あちこちと歩き、喉乾きたり。

第三章 動詞

- 一 春も過ぎ、はや夏來りぬ。
- 二 書を讀み、文を作る。
- 三 成功を喜び、失敗を悲しむ。
- 四 瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。
- 五 彼の功多きに居る。

右の例の傍線を施した語のやうに、主として事物の動作又は存在をあらはす語を動詞といふ。

動詞の中、過ぐ、來るの如く、自然の動作をあらはすものを自動詞、讀む、作る、喜ぶ、悲しむの如く、その動作を受ける目的の語を有つものを他動詞と呼ぶことがある。

か  
自 動 詞

を  
他 動 詞

練習題

次の文中から動詞を選び出し、且、其の自動・他動を區別せよ。

- (1) 雪の日の夕暮近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどりつきたる旅僧あり。
- (2) 妻は鏡箱より包を取出して夫に渡す。
- (3) 山を越え河を下り、湖を渡りて一村に出づ。
- (4) たま〜大阪に出水あり。家を流し産を失ひて、路頭に迷ふ者數を知らず。
- (5) やがて運び來れる貧しき膳に向かひ、僧は喜びて箸を取りぬ。
- (6) 松下禪尼は手づから障子の破れをつくるひゐたり。

第四章 形容詞

形容詞

一 髪黒く、色白し。

二 我がなつかしき住家見ゆ。

三 この花は色美しけれど香なし。

右の例の傍線を施した語はすべて、事物の性質又は状態をあらはす語である。事物の性質又は状態をあらはす語は他にもあるが、いひ切る場合に、口語ならばい、文語ならばしとなるものを形容詞といふ。

存在をあらはす有りは動詞であるが、存在せぬことをあらはす無しは形容詞である。

練習題

次の文中から形容詞を選び出せ。

- (1) 蒲公英たんぼい、葦などの咲けるを見つゝ、ゆくも樂し。
- (2) 行くは何處ぞ、桃咲く村へ。今日はうれしき遠足の日よ。
- (3) 近き船は行けども、遠き帆影は動かんともせず。
- (4) 年若き日に勉めざれば、老いて後、悔ゆること多し。
- (5) 彼は富めども、我は貧し。
- (6) 山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。
- (7) 物事は始まるければ終もわるく、始よるしければ終もよるし。

美しくあり  
静かあり  
形容詞  
動詞

形容動詞  
用言

第五章 形容動詞

一 舞の姿いと美しかりき。

二 今日けふは波いと静かなり。

三 威風堂々たり。

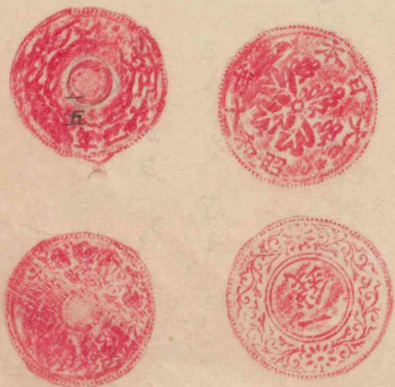
右の例の傍線を施した語のやうに、意味は形容詞と同じく事物の性質又は状態をあらはしてゐるが、形はラ變の動詞と似てゐるものを形容動詞といふ。

動詞・形容詞・形容動詞を用言といふ。

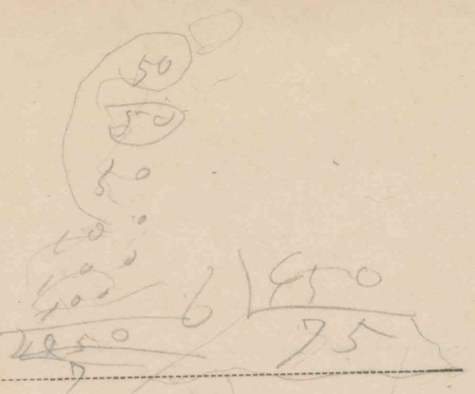
練習題

次の文中の形容動詞を指摘せよ。

- (1) 場に臨みて平然たり。



- (2) 内海の沿岸及び島々には名勝の地少からず。
- (3) 効果空しからずして宿志の果さるゝも近きにあらんとす。
- (4) ブラジルはコーヒーの主要なる産地なり。
- (5) 見渡す限り茫々たる原野なりき。
- (6) 町のりつばなることも他に比して優るとも劣ることなし。
- (7) 花子様は温厚なる方にして、我等に接すること妹の如し。
- (8) 橋中佐は部下をあはれむ心深かりき。
- (9) よからぬ業をして、人を苦しむることなかれ。
- (10) 皎々たる明月今や滿地を照しぬ。



第六章 助動詞

一 弟橘媛は、日本武尊の御身代りとなられて、海に飛入り、怒れる海神の御心をなだめらる。

二 苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も残らずなりぬ。

右の例の傍線を施した語のやうに、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはす語を助動詞といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、次の場合のやうに他の品詞に添ふこともある。

名詞・代名詞に添ふ場合

女學生たるの自分を守るべし。



我を知る者は貴女なり。

形容詞・形容動詞に添ふ場合

櫻は散るが面白きなり。

來ること遅かりき。

他の助動詞に添ふ場合

彼が多年の苦心は遂に報いられたり。

助詞に添ふ場合

落花雪の如し。

天馬空を行くが如し。

かやうに助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞・形容動詞・助詞又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

試験にもなる

練習題

次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞である。その意味を口語でいへ。

- (1) 春は春季皇靈祭を行はせらる。
- (2) 彼の熱心は、強く人々を感動せしめしにや、寄附するもの意外に多かりき。
- (3) 一豊妻の深き志に謝せり。
- (4) 鹿の人なつかしげに寄り來るは、奈良には缺くべからざる風情なるべし。
- (5) 夜もいとふけ、月も既に入りぬ。
- (6) 國に母をや残すらん、彼のまぶたに露ありき。
- (7) 頼朝義經に義仲を攻めさす。

第七章 助詞

- 一 貴女だによくば行かるゝもよからん。
- 二 東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。
- 三 問はるれども答へず。
- 四 これを持ちて東京まで行かれよかし。

右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語に添うて他の語との關係をあらはす語を助詞といふ。

練習題

次の文中から助詞を選び出せ。

- (1) 波にたゞよふ氷山も、來らば來れ恐れんや。
- (2) はるくくと風のゆくへの見ゆるかなすゝきがはらの秋の夜の月。
- (3) 夢にのみ見し山川も、あけくれしたひし家も、近く迫りぬ。
- (4) 君が代は千代に、八千代に、さゞれ石のいはほとなりて、苔のむすまで。
- (5) 停車場の外に出づれば、秋晴の空すみて暖さ春の如し。
- (6) 今こそ君は其の良馬を求めて、主君のおほめにあづかり給へ。

第八章 副詞

一 春雨しとくと降る。

二 感いよくと深し。

三 波いと静かなり。

右の例のしとくととは降るといふ動詞を修飾し、いよくとは深しといふ形容詞を修飾し、いととは静かなりといふ形容動詞の意味を修飾してゐる。かやうに用言を修飾する語を副詞といふ。

一 あの方はや、暫し考へる給へり。

二 僅か一米の差にて敗れたり。

右の例のやうに、副詞はまた他の副詞又は名詞の意味を修飾することもある。

副詞

いと。大へん

右の例のやうに、副詞は又其の下の方又は連語全體を修飾することもある。  
かやうに、副詞は、動詞・形容詞・形容動詞・名詞・他の副詞・文又は連語等の意味を修飾するものである。

練習題

一、次の文中から副詞を選び出し、その修飾してゐる語を示せ。

- (1) 梅花も白きはすでに過ぎんとし、椿は花葉よりも多く、ぼて／＼と早や落初めぬ。
- (2) 汽車はいと徐に動き始めぬ。

- (3) 案内の人に導かれて、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。
- (4) 折しも美しくかざりたる船、平家の方より漕出す。
- (5) 立木極めて少かりしかば、更に植込みたる木の數、實に十數萬本に及べり。
- (6) 容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人々に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。

二次の副詞を使つて短文を作れ。

あたかも                      やがて                      恐らく                      忽ち                      たゞ  
 おもむろに

第九章 接續詞

接續詞



- 一 山又山を打越えたり。
  - 二 吹雪はげしかりき。されど、屈せず進みぬ。
  - 三 書を読み、且、字を習ふ。
- 右の例の傍線を施した語のやうに、その前後の語連語又は文を接續する語を接續詞といふ。

練習題

- 一次の文中から接續詞を選び出せ。
- (1) 兩岸及び島々、見渡す限り田園よく開けてまうせんをしけるが如し。

- (2) 本日は南又は西の風晴。但し午後曇。
  - (3) 富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるにあらざれば、我之に居らず。
  - (4) 吉野に遊び、ついで高野にのぼれり。
  - (5) 樺太は大陸の地績なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに之を解決したる人遂に我が日本人の中より現れぬ。
  - (6) 筆或は鉛筆にてしたむべし。
  - (7) 孔子は廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりき。
- 二次の接續詞を使つて短文を作れ。
- 故に            もしくは            したがつて            されば

第一〇章 感動詞

感動詞

- 一 あゝ、悲しいかな。
  - 二 あはれ、友は此の世を去りぬ。
  - 三 いざや、行かん。
  - 四 やよ、正行、わが言ふことを聞け。
- 右の例の傍線を施した語のやうに、感動した場合に覺えず發する語や、呼びかけ、應答の語を感動詞といふ。
- 「あゝ、悲しいかな」「あな面白の樂の音や。」のあゝ、あなは感動詞であるが、かなや等は感動の意をあらはす助詞である。即ち感動詞は、獨立した發聲の語だけをいふのである。

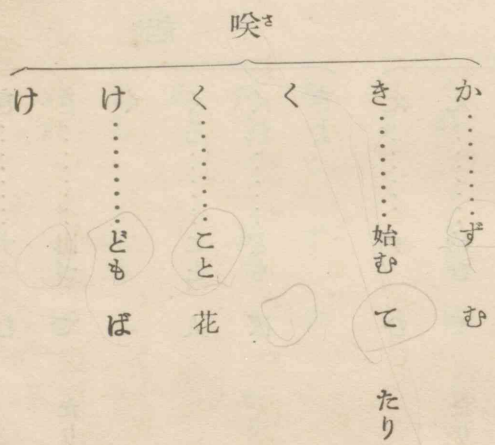
練習題

次の文中から感動詞を選び出せ。

- (1) いざや我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。
- (2) すは敵の大軍の押寄せたるぞ。
- (3) 「いや、おのれの心にてはあるまじ、誰に教へられて來れるぞ。」いな、教へられたるには候はず。
- (4) あなあさましの御姿や。
- (5) いで大船を乗出して、我は拾はん海の富。
- (6) いざ立寄りて見て行かむ。
- (7) いかにも興一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

第二篇 單語篇 (下)

第一章 文語動詞の活用形





右の例のやうにして、すべての動詞をしらべると、文語の動詞も口語と同じく、

- 一 大部分の動詞には、變化する部分と變化せぬ部分がある。
- 二 動詞の變化する場合には、その中に必ず五十音圖の同行の音をもつてゐる。
- 三 動詞は使ひ方によつて六つの形に變化する。

といふことがわかる。

かやうに、動詞の形一語尾の變化することを活用といひ、變化せぬ部分を語幹、變化する部分を語尾といひ、又動詞の活用の六つの形を活用形といふ。

第一形 主として助動詞ずむ等に續けて動作が未だ然うなつてゐない意をあらはす形であるから未然形といふ。

活 語 活  
用 語 用  
形 尾 幹 用  
未 然 形  
(將 然 形)

連 用 形

助 動 詞  
未 然 形

第二形 主として用言に連なる形であるから連用形といふ。

この形はまた助動詞たり、助詞て等に連なる。

一 書を讀み字を習ふ。

二 父は畠に出で、子は山に行く。

右の例のやうに、連用形は、又文意を中止して下に續ける爲に使はれる形である。この場合特に中止形と呼んでゐる。

喜 悲 遊 光 教

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形である。

第三形 主として文意を終止する爲に使はれる形であるから終止形といふ。

第四形 主として體言に連なる形であるから連體形といふ。

第五形 主として助詞どもば等に續けて動作が已に成立つて

終 止 形  
連 體 形

中 止 形



已然形  
命令形

ある意をあらはす形であるから已然形といふ。これは口語とはちがふ。  
第六形 専ら命令の意をあらはす爲に使はれる形であるから命令形といふ。

練習題

次の語を活用させよ。

強ふ	得	延ぶ	着る	覺す	覺む	覺ゆ	恥づ
消ゆ	流る	煮る	吼ゆ	有り	交ゆ	交る	來る
混ず	來	懲る	爲	死ぬ	死す	報ゆ	用ふ
堪ふ	居る	老ゆ	蹴る	落つ	落す	植う	顧みる

四段活用

一 四段活用

第二章 文語動詞の活用の種類

語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
咲く	か	か	ら	き	く	く	け	け
降る	ふ	ふ	り	る	る	れ	れ	れ

右の例のやうに、五十音圖のアイウエの四段に活用するものを四段活用といふ。

文語四段活用の動詞は、五十音圖のカ(ガ)サ(タ)ハ(バ)マ(ラ)の各行にある。  
文語四段の活用は口語と同じである。

上二段活用

二 上二段活用

右の例のやうに、五十音圖のイウの二段の音と、それに連體形に  
る、已然形にれ、命令形によが添うたものとて活用してゐるもの  
を上二段活用といふ。

文語上二段活用の動詞は、五十音圖のカ(ガ)タ(ダ)ハ(バ)マヤウの各行  
にある。文語上二段の活用は口語では上一段となる。

### 三 上一段活用

見る	射る	語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(み)	(い)			み	い	いる	いる	いれ	いよ

ア)四 下=上  
イウエオ

右の例のやうに、五十音圖のイの段の音と、それに終止形と連體  
形にる、已然形にれ、命令形によが添うたものとて活用してゐる  
ものを上一段活用といふ。

文語上一段活用の動詞は、五十音圖のアカナハマヤウの各行にある。  
文語上一段の活用は口語でも同じであるが、語数は極めて少く、語幹  
と語尾との區別のつかぬものが多い。

### 四 下二段活用

棄つ	得	語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	(う)			え	え	う	うる	うれ	えよ

右の例のやうに、五十音圖のウエの二段の音と、それに連體形に  
る、已然形にれ、命令形によが添うたものとて活用してゐるもの

下二段活用

を下二段活用といふ。

文語下二段活用の動詞は、五十音圖の各行及びガサダバの各行にある。文語下二段の活用は口語では下一段となる。

五 下一段活用

語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
蹴る	(け)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

蹴るといふ動詞は、右のやうに、五十音圖のエの段の音と、それに終止形連體形に、已然形に、命令形に、よの添うたものとして活用してゐる。この活用を下一段活用といふ。

文語下一段活用の動詞は、蹴るといふ一語だけであるが、口語と同じく、今は蹴らず蹴りたりのやうに、四段活用に使はれることもある。

以上五種の活用を正格活用といふ。

正格活用

カ行變格活用

六 カ行變格活用

語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
來	(く)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

來といふ動詞は、右のやうに、五十音圖のイ・ウ・オの三段の音と、それに連體形に、已然形に、命令形に、よの添うたものとして活用してゐる。この活用をカ行變格活用(略してカ變)といふ。

文語カ變の動詞は來といふ一語だけであるが、文語と口語とでは終止形命令形がちがふだけである。

七 サ行變格活用

語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
爲	(す)	せ	し	す	する	すれ	せよ

爲といふ動詞は、右のやうに、五十音圖のイ・ウ・エの三段の音と、それに連體形に<sup>レ</sup>、已然形に<sup>レ</sup>、命令形に<sup>ヨ</sup>が添うたものとして活用してゐる。この活用をサ行變格活用(略してサ變)といふ。

文語サ變の動詞は、元來<sup>ス</sup>といふ一語だけであるが、他の語に<sup>レ</sup>が添うて、多くのサ變の動詞が出来る。例へば

勉強す	登山す	發明す	解釋す
發す	達す	罰す	製す
報ず	講ず	論ず	感ず
旅 <sup>タビ</sup> す	罪す	位す	心す
全うす	辱うす	高うす	空しうす
先んず	疎んず	重んず	輕んず
新にす	恣にす	専らにす	審 <sup>ツマシ</sup> にす

コーチす      タツチす      スケツチす

文語と口語とでは未然形終止形命令形がちがふ。

### 八 ナ行變格活用

語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

死ぬといふ動詞は、右のやうに、五十音圖のアイウエの四段の音と、それに連體形に<sup>レ</sup>、已然形に<sup>レ</sup>が添うたものとして活用してゐる。この活用をナ行變格活用(略してナ變)といふ。

文語ナ變の動詞は、死ぬの外往ぬといふ語があるが、往ぬは今方言の外は使はれない。

文語のナ變死ぬは口語のやうに四段に使つてよい。

ラ行變格活用

九 ラ行變格活用

有り	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ

有りといふ動詞は右のやうに四段活用と同じく五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用するが終止形がちがふ。この活用をラ行變格活用(略してラ變)といふ。

ラ變の動詞は、有りの外、居り、侍りといふ二語があるが、今は居りが四段に使はれる外、あまり使はれない。  
文語のラ變は口語では四段となる。

以上四種の活用を變格活用といふ。  
文語動詞の活用には以上の九種がある。

變格活用

行(か)了 四段  
落(け)す 上二  
捨(す)す 下二

第三章 文語動詞の識別法  
*(このからである)*  
**大事**

一 活用の種類を識別する法

語数が少くて暗記するとよいもの。

上一段 射る 鑄る 著る 似る 煮る 干る 見る  
オモ

(顧みる 惟みる 鑑みる 試みる) 居る 率ある

下一段 蹴る

二カ 變く(來)

サ 變す(爲) 他語にすの添うたもの。

ナ 變死ぬ(往ぬ)

ラ 變有り(居り) (侍り)

右の外は

四 段 打消のずがアの段の音に添ふ。 讀ま…ア  
 上二段 打消のずがイの段の音に添ふ。 落ち…イ  
 下二段 打消のずがエの段の音に添ふ。 消え…エ

二 活用の假名遣を識別する法

(イ) ア行ハ行ヤ行ワ行の識別法

○ア行 射る 鑄る …… 上一段

得…… 下二段

○ワ行 居る 率ある …… 上一段

植う 飢う 据う …… 下二段

○ヤ行 終止形がゆとなるもの。

右の外はすべてハ行活用である。

(ロ) ザ行ダ行の識別法

○ザ行 1 混ず…… 下二段

2 サ變動詞中の講ず論ず重んず等のやうに語尾の濁るもの。

右の外はすべてダ行活用である。

練習題

次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

(1) 御生前 御好み ありし 品を 携へ 來て、神前に さゝげ  
たしと 願ひ出づる 者 多し。

(2) 名古屋の 天守閣には 棟の 兩端に 金の しやちほこ  
あり。 其の 高さ 八尺五寸、 朝日 夕日に 輝き  
て、 遠く 數里の外より 望み見る ことを 得べし。

- (3) 畫師は夜もすがら寝ねずして、明日はかく畫が  
んなど獨言してゐたり。
- (4) 喜捨を受けたる此の金を、一切經に費すも、飢  
ゑたる人々の救助に用ふるも、歸する所は一にして  
二にあらざ。
- (5) 雄鷄は箱のふちをふまへて、首をすゑ、胸を張り、  
今やときをつくらんとする様なり。
- (6) 春は來りぬ。越路の雪も解初めたれば、柴田勝家  
先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江  
に出でしむ。

自修題

① 次の文中から動詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

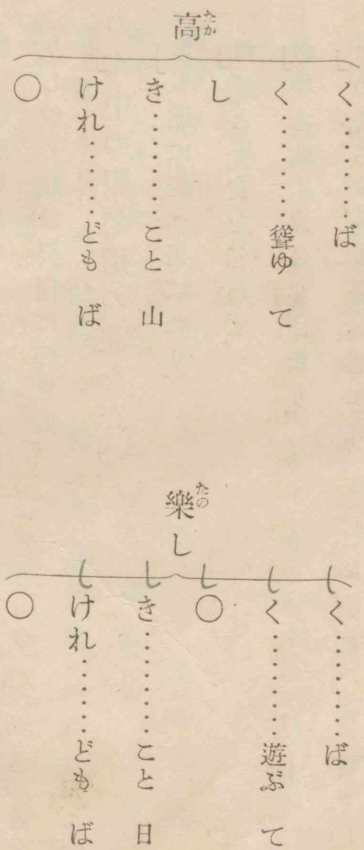
- (1) 那須餘一は空飛ぶ鳥も三羽に二羽は必ず射落す程の上手なり。

- (2) すべて物は破れたる時つくるへば、しばらくはなほ用をなすものぞ。
- (3) 或畫師久しく寄食してありけるが、何一つ畫がくこともなく、毎日遊び暮して既に數年を経たり。
- (4) 机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めりたりし彼の眼は異様に輝きぬ。

二次の文中の假名遣の誤を正せ。

- (1) 望も遂に絶へ果てたり。
- (2) 飢ゆとも食を乞わず。
- (3) 教ゆるは學ぶの半ばなり。
- (4) 血の流るゝをも覺へざりき。
- (5) 田を植ふる乙女の歌遙に聞ゆ。
- (6) 老ひて益壯なり。

第四章 文語形容詞の活用



右の例でわかるやうに、文語形容詞は

- 一 力行・サ行の兩行に跨がつて活用する。
- 二 命令形はない。

シク活用

中止形

副詞形

語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然
高	たか	く	く	し	き	けれ
樂	たのしみ	しく	しく	し	しき	しけれ

語幹にしの有るものをシク活用といひ、無きものをク活用といふ。シク活用では終止形にその語幹を用ひる。

文語形容詞は口語とはその活用がちがふ。

- 一 夏は暑く、冬は寒し。
- 二 雨はげしく、風強し。

右の例のやうに、形容詞の連用形は、動詞の場合と同じく中止形にも用ひられるが、又次の例のやうに、副詞の働をする場合が多いので、これを副詞形ともいふ。

- 一 水清く流る。



二花あわたゞしく散れり。

練習題

一次の文中から形容詞を選び出し、其の活用の種類をいへ。

- (1) 價高くば、買ふこと難からん。
- (2) 炭もなく、薪もなきに、焚きて暖を取らん由もなく、軒に垂るゝ氷は、とぎすませる乃に似てすさまじ。
- (3) もみつがは、伸び縮みすること著しきを以て用途甚だ狭し。
- (4) 一豊はわけて家も貧しければ、心にたゞ欲しと思ふのみにて空しく家に歸りぬ。
- (5) 松青く、樓門赤く、茶煙絶えぐに、あがりて、花極めて

白し。

- (6) 朝夕は、凌ぎやすけれども、日中は堪へ難し。

二次の形容詞を活用させよ。

鋭し 羨まし 悲し 勇ましくかひなくし おびたゞし  
 神々し 暗し 明かるし 淋しうやくし

自修題

次の文中から形容詞を選び出し、其の種類と活用をいへ。

- (1) 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり。なきさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。
- (2) 枇杷はうまけれども、種子大きく肉少きは惜し。
- (3) 死は鴻毛より軽く、義は泰山より重し。

- (4) うるはしき眞玉白玉、香よき木の實草の實、うづたかき積荷の中に、海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懐かしき故郷の港。
- (5) さて、金なければせん方なけれど、あれ程の名馬、武士として手に入れたきものなり。
- (6) 何れおとらぬ馬多く集り來れる中に、一きは目立ちてたくましき馬なりき。
- (7) けやきはもくめ美しく、磨けば美麗なる光澤を生ず。
- (8) 金色に咲きこぼれ枝々にこぼれ匂ひて、もくせいのゆかしきかをり。なつかしき師の君を見送りし去年こぞの今頃、此の花の盛りなりけり。



第五章 文語形容動詞の活用

静か

なり なる...こと  
なれ...ば  
なれ

堂々

たり たる...こと  
たれ...ば  
たれ

烈し

○終上形  
かり...き  
から...ず  
かる...べし  
○いせ  
かれ命令

連体

右の例のやうに、文語の形容動詞には三種あつて、其の活用は略ラ變の動詞と同じである。但し、文を中止する場合の形は形容動詞にはなく、次は言ひ方をする。

一 山高く、水深かりき。  
 二 風靜かに(して)、波穩やかなり。  
 三 語氣凜然として(態度堂々たり)。

にはラ立友の動詞と違つて、

タナカ  
 リリリ  
 活活活

形容動詞の中、語の末がかりとなるものをカリ活、なりとなるものをナリ活、たりとなるものをタリ活と呼ぶ。

種類	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	已然	命令
カリ活	(烈しかり)	烈し		から	かり		かる		かれ
ナリ活	靜かなり	靜か		なら	なり		なる	なれ	なれ
タリ活	堂々たり	堂々		たら	たり		たる	たれ	たれ

文語の形容動詞は口語とは、その種類活用がちがふ。

**練習題**

次の文中から形容動詞を選び出し、その活用を言へ。

- (1) 海の靜かなることは鏡の如く、朝日夕日を負ひて鳥がくれゆく白帆の影ものどかなり。
- (2) エヂソンは例の如く、實驗室にこもりて研究に餘念なかりき。
- (3) 天勾踐を空しうするなかれ。時、范蠡無きにしもあらず。
- (4) 身なりはそまつなりしが氣品高かりき。
- (5) 障子の切張はまだらになりて見苦しからん。ことごとく張りかへ給へ。

- (6) 渺々たる 大海に 漕出づる 心地 いはん方なし。
- (7) 月 明らかに、星 稀なり。

自修題

次の文中から形容動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 御手傳を願ひ出づる者多かりしかば、何れも十日を限りて土木に従事せしめたり。
- (2) 今まで荒れに荒れぬたる大海、おのづから静まりて、おだやかなる風となれり。
- (3) 勉強も大切なれど、身體も大切なり。
- (4) 夏は山海皆緑にして、目覺むるばかり鮮かなり。
- (5) 如何なる困難を忍びても、ちかつて此のくはだてを成就せん。

第六章 文語用言の音便

一 動詞の音便

或語が他の語に続く場合、發音の便宜上その音が變化することがある。これを音便といふ。文語動詞の音便は、その連用形から助詞のてに続く場合に起る。

文語助動詞たりに続くものは、今日普通には使はれない。

口語では助詞てたり、助動詞たに連なる場合に起る。

イ音便 きぎがい

咲きて…咲いて 泳ぎて…泳いで

ウ音便 ひがうに轉ずる場合

買ひて…買うて

泳ぎて…泳いで

音便

イ音便

ウ音便

撥音便

撥音便 にびみが撥音のんに轉ずる場合

死にて…死んで 飛びて…飛んで

踏みて…踏んで 踏みて(踏んで)

促音便

促音便 ちひりが促音のつに轉ずる場合

勝ちて…勝つて 買ひて…買つて 立ちて

賣りて…賣つて 歸りて

ぎにびみが音便になる時は次に來るては濁音となる。

文語動詞の音便は、サ行以外の四段及びナ變・ラ變の連用形に起る。

二 形容詞の音便

イ音便 文語形容詞の連體形がいとなる場合

あゝ悲しきかな…あゝ悲しいかな

美しきかな…美しいかな

ウ音便

ウ音便 文語形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして…山高うして

若くして死す…若うして死す

口語形容詞ではウ音便だけである。

練習題

次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

(1) 船を <sup>ウ(ヒウ)</sup> やと<sup>ウ</sup>りて 木曾川を下る。激流岩を <sup>掬(ミーン)</sup> 噛んで 心を <sup>ウ</sup> 寒からしむ。

(2) 朝に星を戴いて <sup>イ(キイ)</sup> 出で、夕に月を踏んで <sup>掬(ミーン)</sup> 歸る。

(3) 救はんとすれど、悲しいかな <sup>イ(キイ)</sup> 我が力及ばず。

(4) 常世 <sup>ツネヨ</sup> は時 <sup>トキ</sup> こそ <sup>イ(キイ)</sup> 來れど、瘦馬に <sup>掬(ミーン)</sup> 鞭うつて <sup>イ(キイ)</sup> はせつく。

(5) 仰いで <sup>イ(キイ)</sup> 天に愧ぢず、俯して地に愧ぢず。

自修題

一次の文中の音便を示し、其の種類をいへ。

- (1) 發憤しては食を忘れ、樂しんでは憂を忘る。  
*形格ウ(ク)ウ*
- (2) 主人はからうじて僧をとまなひ歸れり。  
*イ(キ)イ*
- (3) こは如何に降つてわいたる敵の大軍、滿ちくたり。  
*イ(キ)イ*
- (4) 清正手早くかぶとの緒を切つたりけり。  
*イ(キ)イ*
- (5) 「ずは勝つたるぞ」と手を打つて喜びけり。  
*イ(キ)イ*

二次の文の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) 重荷を負ふて遠き道を行くが如し。
- (2) 天を仰ひて嘆息せり。
- (3) 山紫に水清ふ、大和は歌によいとこる。
- (4) 新聞を読むで後行くべし。

受身の助動詞

一 受身の助動詞 る・らる

人に敬は：る。  
賊捕へ：らる。  
他

第七章 文語助動詞の種類及び活用

語/活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

二 可能の助動詞 る・らる・べし・べかり

此の書は、我にも讀ま：る。  
何人にも解せ：らる。

る・らるの活用は受身の場合と同じである。但し、命令形は

可能の助動詞

自發の助動詞

ない。

一 待たるゝものは驚の聲。  
二 母の事のみ思ひ出でらる。

右の例のやうに、可能の助動詞は、また動作の自然に起る意味にも用ひられる。之を特に自發の助動詞ともいふ。

右の外に、推量の助動詞から轉じて可能の意をあらはす語にべし・べかりがある。

此の山は、容易に登る：べし。  
危険にして、近づく：べから：ず。

語	活用
べし	未然 連用 終止 連體 已然 命令
べかり	未然 連用 終止 連體 已然 命令

使役の助動詞

三

使役の助動詞 す・さす・しむ

弟に字を習は：す。

犬を子供に馴れ：さす。

頼朝、義經をして義仲を攻め：しむ。

四

べかりの未然形に打消のずがつく時は、右の例のやうに不能の意をあらはす外に、禁止の意をもあらはす。  
花を折る：べからず。

崇敬の助動詞

四

崇敬の助動詞 る・らる・す・さす・しむ

語	活用
す	未然 連用 終止 連體 已然 命令
さす	未然 連用 終止 連體 已然 命令
しむ	未然 連用 終止 連體 已然 命令

父、東京に行か：る。

先生は、本日缺席せ：らる。

殿下、臨幸あら：せ：らる。

皇后陛下、日光に行啓せ：させ：給ふ。

天皇陛下には、親しく觀兵式に臨ま：しめ：給ふ。

る。らるは受身、す。さ。す。し。むは使役の場合とその活用が同じである。

す。さ。す。し。むは右の例のやうに、下にらる。給ふ等の添ふ場合が多い。

随つて今は未然形連用形の外は餘り使はれない。

崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に給ふ。おはします。まします。奉る。侍り。候といふやうな動詞が轉じて使はれる。此の場合は助動詞として取扱ふ。

五 打消の助動詞 ず。ざり。じ。まじ

風吹か：ず。

ざり：き。

じ。

風吹く：まじ。

殿下、槍ヶ嶽に登り：給ふ。

母宮もなげき：おはします。

皇大神は此の處に鎮り：まします。

幼より養ひ：奉る。

かくて夜を明かし：侍り。

ありがたく頂戴仕り：候。



時の助動詞

未 來

六 時の助動詞

(イ) ① 未來の助動詞 む(ん)

明日は雨晴れ…む(ん)

② じまじは、右の例のやうに打消の推量の意となる外に、決意をもあらはす。  
再び過失を繰返さ…じ。(繰返す…まじ)

まじ	じ	ざり	ず	語活用
まじく		ざら	ず	未然
まじく		ざり	ず	連用
まじ	じ		ず	終止
まじき	じ	ざる	ぬ	連體
まじけれ	じ	ざれ	ね	已然
		ざれ		命令

完

了

① (ロ) 完了の助動詞 む・つ・たり・り

花咲き…ぬ

…つ

花咲け…り

むは今日の文章中ではんと書く。

む	語活用
	未然
	連用
む(ん)	終止
む(ん)	連體
め	已然
	命令

り	たり	つ	ぬ	語活用
	たら	て	な	未然
り	たり	て	に	連用
り	たり	つ	ぬ	終止
る	たる	つる	ぬる	連體
	たれ	つれ	ぬれ	已然
		てよ	ね	命令

過 去

(ハ) 過去の助動詞 き・けり

鐵眼といふ僧あり：き。  
出行き：けり。

語	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
けり	き			けり	ける	けれ	

けり 特

願望の助動詞

七 願望の助動詞 たし・まほし

今日は静養し：たし。  
月見に行か：まほし。

推量の助動詞

八 推量の助動詞 らし・べし・めり・らむ・けむ・まし

雨降る：らし。  
...べし。  
...めり。

國に母をや残す：らむ。  
いづち行き：けむ。  
御代とこしへにめでたから：まし。

語	活用	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

形



君：君たり、臣：臣たり。

語	活用
たり	未然
たり	連用
たり	終止
たる	連體
たれ	已然
たれ	命令

比況の助動詞

一 比況の助動詞 如し

風光繪の：如し。

咲く花のほふが：如し。

語	活用
如し	未然
如く	連用
如く	終止
如き	連體
	已然
	命令

如しは轉じて推量の意に使はれることがある。

彼は未だ知らざるもの：如し。

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用のもの、(二)形容詞に似た活用のもの、(三)獨特の活用ものがある。

練習題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 千木チキのほとりを飛べる（飛ん）鳩（鳩）の（さ）ながら雀（雀）の如く見ゆるも、社殿の高大なる（高）爲（為）なるべし。
- (2) 主上はや院庄に入らせ（給ふ）
- (3) 此の方面の戦闘に二子を失ひ（給ひ）つる閣下の心如何にぞや。
- (4) 炭素線として（指）は日本の竹最も適當なりしかば、エヂソンは専ら之によりて電燈の心（心）を製出せり。
- (5) 「先生の墓所は細道なれば（指）知れ申す（申す）まじ、案内し

鹿と牛へすすすかひウ

- (6) 興福寺の塔、猿澤の池に影をうつして南都第一の美觀たり。
- (7) さし昇る朝日の如く、さわやかにもたまほしきは心なりけり。
- (8) いづかたに志してか日盛のやけたる道を蟻の行くらむ。
- (9) 海まきあぐるたつまぎも起らば起れ驚かし。

自修題

次の文中から助動詞を選び出し、其の種類及び活用をいへ。

- (1) 自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

- (2) こはたゞ事ならじと將軍直に物見の兵を出してうかゞはしむ。
- (3) かゞり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。
- (4) 主上は詩の心を御さとりありて、天顔殊にうるはしく笑ませ給ふ。
- (5) 平素きはめて御質素にわたらせられし御有様、一つ／＼の御品の上にかゞはれて、無量の感にうたれたり。
- (6) なぎきに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にかめしく向かひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。
- (7) 明治神宮の南參道に入れば、夜來の雨に清められし玉砂利さくさくと鳴りて、參拜の人々、あたかも言合はせたる如く、足並の自ら揃ふも尊く思はる。
- (8) 舊御苑は、明治天皇御親ら森の下道、下草まで何くれと御仰ありて、自然のまゝに造らせ給ひ、昭憲皇太后かぎりなくめでさせ給ひて、しば／＼行啓あらせられたりとぞ。

第八章 文語助動詞の接續

受身(可能・崇敬)の助動詞

他の品詞と助動詞との接續

一 受身(可能・崇敬)の助動詞

る……四段ナ變・ラ變の動詞の未然形

彼の説大いに世に行はる。  
子供なほ幼ければ死なれず。  
父は家に居らる。

らる……右以外の未然形

敵に捕へらる。下ニ 受  
誰にも解せらる。下ニ 可  
母君も來られたり。カ変 合

らるがサ變につく時「罪せらる」「評せらる」「解せらる」となる類は差支ない。この場合は一を「罪さる」「評さる」「解せらる」となる類は差支ない。

可能の助動詞

二 可能の助動詞

語と見ずもとの形にかへして動詞と助動詞とに分解して取扱ふ。

らるは受身の助動詞と同じである。

べしべかりは推量の助動詞から轉じて用ひられたものであるから、接續は推量の助動詞のべしと同じである。

使役(崇敬)の助動詞

三 使役(崇敬)の助動詞

す……四段ナ變・ラ變の動詞の未然形

外に待たす。  
子を死なす。  
わが君にあらせらる。  
苗を植ゑさす。  
彼に來さす。  
臨幸せさせ給ふ。

さす……右以外の未然形

苗を植ゑさす。  
彼に來さす。  
臨幸せさせ給ふ。

え

さすがサ變につく時「手習せさす」「周旋せさす」「賣買せさす」となるべきを「手習さす」「周旋さす」「賣買さす」となる類は差支ない。

○しむ……全動詞の未然形

塵を捨てしむ。  
彼處に居らしむ。  
行幸せしめ給ふ。

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞

受身使役の助動詞と同じである。

打消の助動詞

五 打消の助動詞

ず……全動詞の未然形  
ざり……同前  
じ……同前  
雪未だ消えず。  
全く影を見ざりき。  
未だ死なじ。

まじ……  
ラ變の連體形  
右以外の終止形

さるいはれ有るまじ。  
俄に來まじ。

まじはじよりも推量の意強く、その接續は推量の助動詞のらしむし等と同じである。

六 時の助動詞

(イ) 未來の助動詞

む……全動詞の未然形  
明日は雨晴れむ。

(ロ) 完了の助動詞

ぬ……ナ變以外の連用形  
朝日は輝きぬ。

(ナ變にはつかない)

つ……全動詞の連用形  
向かふの側へ行きかねつ。

たり……同前  
傷を受けたり。

時の助動詞

未來

完了

過  
去

り……四段の已然形

書を買へり。

サ變の未然形

發見せり。

りだけは右のやうに特別の接續をなす。

(ハ) 過去の助動詞

き……全動詞の連用形

昔、高僧ありき。

(但し、きがカ變・サ變につく時は、左のやうになる。)

終止形きはサ變にはつかない。

	種類 活用	未然	連用
カ變	來 <sup>カ</sup>	ししか	來 <sup>キ</sup> ししか
サ變	爲 <sup>セ</sup>	ししか	爲 <sup>シ</sup> き

又、サ行四段にししかがつく時、「暮しし時」「過ししかば」となるべきを「暮せし時」「過せしかば」となる類は差支ない。

けり……全動詞の連用形 立去りけり。

願望の助動詞

七 願望の助動詞

たし……全動詞の連用形

献上したし。

まほし……全動詞の未然形

我也行かまほし。

まほしは、未來の助動詞むとほしとの合成であるから、その接續はむと同じく全動詞の未然形につく。

推量の助動詞

八 推量の助動詞

らし……ラ變の連體形

人有るらし。

右以外の終止形

霰降るらし。

かゝる事もあるべし。

やがて發表すべし。

べし……同前  
(べかり)

鐵をも斷つべし。

再びあるべからざる事なり。









ししと云ふはサヌケ  
 本然の形にづくたか  
 らせると云ふ

述べよ。

- (1) 何時までもかくておはすべきにあらねば何處へなりとも行き給へ。  
下二 尊 未 打 詠
- (2) 行交ふ村人の取りつくるはぬ言の葉手に取る如く聞かぬ。  
四末 打 詠
- (3) 早く一人前の商人となりて親に安心させたまし。  
未 未 未 打 詠
- (4) 我が夢はいづくの山にやあらん驅けめぐりつ。  
下二 未 未 打 詠
- (5) 同じ物にても意の如くに得らるれば價なく得がたければ價あるなり。  
指 未 未 打 詠
- (6) あはれ今年の秋も往ぬめり。  
未 未 未 打 詠
- (7) 一木一草に至るまで歴史あり古歌あり人をして低回去る能はざらしむ。  
指 未 未 打 詠

二次の文の誤を正し、理由をいへ。

いふに全動のり連体  
 形はつづくたかありり  
 空は終止形である  
 かくて終るり連体  
 形はつづくたかありり

未形 四末  
 ナヌケ  
 ナヌケ  
 便身  
 打詠

- (1) 雷にうたれて死なり。  
死(ナヌケ連用) たり(全動のり連用)
- (2) 行はば行はるべし。  
行はば行はる(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (3) かゝる行はするまじきことなり。  
かゝる行はする(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (4) 彼の財産も盡るらし。  
彼の財産も盡(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (5) 彼方の山の麓なるは霞の之を隔つなり。  
彼方の山の麓なるは霞の之を隔(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (6) 奮闘しし甲斐ありて見事成功したりき。  
奮闘しし甲斐ありて見事成功したり(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (7) 首尾よくその任を終へり。  
首尾よくその任を終(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (8) 言々句句々肺肝より出で、溢る如き熱誠にみちたり。  
言々句句々肺肝より出で、溢る如き熱誠にみち(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (9) 飛ぶ鳥を射しむるに射ずといふことなし。  
飛ぶ鳥を射(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり
- (10) その任は我に就かし給へ。  
その任は我に就(連体形) 右以外の終止形はつづくたかありり

三助動詞を動詞の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形につくも  
 のに分類して表をつくれ。

第九章 文語助詞の種類

助詞は次のやうに、種々の語に添うて種々の意味をあらはすもので、文語も口語の場合と同じやうに、三類に分けられる。その用法は兩者同じものもあり、又ちがふものもある。

一 第一類

主として體言又は體言に準ずる語に附いて、その語に資格を與へるもの。

が 貴女が望む處を聞かむ。君が代。

梅が香あたりにとよふ。

の 秋風の吹く。櫻の花咲けり。

それは彼の本なり。花の都。

つ 天つ神。沖つ風。

外つ國  
皇邊つ皮  
沖つ皮

第二類

二 第二類

主として用言及び助動詞に附いて下の意味との

を 書を讀む。

山を下る。

に 机の上に載す。

人に與ふ。

月に叢雲花に風。

東京に行く。

彼に劣らず。

へ 彼方へ逃ぐ。京都へ行く。

と 友人と散歩す。ペンとインクとあり。

彈丸は雨と降る。名を雪子といふ。

水湯となる。

より 學校より歸る。父母の恩は山より高し。

まで 大阪まで行く。

にて 筆にて書く。外國にて生まる。

續きに關するもの。

ば 雪降れば行くまじ。

價安くば買はん。

雪降れば行かず。

價高ければ買はず。

とも 繪に書くとも及ばじ。

死すとも背かじ。

ど 春來れど花咲かず。

ども 行けども盡きず。

も 行くも遅からん。  
急ぎたるも間に合はざりき。

に 努力せしにかひなかりき。

を かくまでとは思はざりしをさても險しき山かな。

が 訪づれしが不在なりき。

て 行きて見ん。

て 友とも知らで、行過ぎぬ。

三

つゝ 涙を流しつゝ語る。  
ながら歩みながら語る。

第三類 種々の語について種々の意味を添へるもの。

は 日本は神國なり。 彼よりは高し。

われは行かざれど、彼は行かん。

湯をば飲めど、水をば飲まず。

彼も行くまじ。 野も山も花盛なり。

父とも母とも思ふ。

日ぞ 月ぞすめる。 我は日本女子なるぞ。

なむ かくなむ言へる。 家をなむ思ふ。

や 果して其の人なりや。 花や散りし。

さることあらんや。



に・へ

第一〇章 注意すべき文語助詞の用法

文語ではには場所を、へは方向を示す場合に使はれる。

東京目的に行く。

彼方へ行く。

口語ではあまり區別がない。

二 ば

(イ) 假定の意をあらはす場合 活用語の未然形に添ふ。

明日雨降れば、遠足は中止すべし。

水清くば、大魚棲まじ。

父上も賛成ならば、汝も行くべし。

假定 未然形  
降ればりもし降るべし  
風吹けば花散るべし  
既定 已然形  
降ればり降るべし  
風吹けば花散るべし

とも

三

とも

(ロ) 既定の意をあらはす場合 活用語の已然形に添ふ。

今日雨降れば、遠足は中止す。

水清ければ、大魚棲まじ。

父上も賛成なれば、汝も行くべし。

口語では、假定形にばを添へて假定の意をあらはし、既定の意をあらはすには、終止形にのだから等を添へる。

動詞・形容動詞及び動詞に似た活用の助動詞の終止形・形容詞及び形容詞に似た活用の助動詞の連用形に添うて假定の意をあらはす。

人笑ふとも意に介せじ。  
勇壯なりとも如何せん。  
悲しくとも泣くな。





に限り、最後のとを省いても差支ない。

宗教と道徳の關係を論ず。

省いてならぬ場合

甲と乙の兄が来た。

甲と乙との兄が来た。甲の兄と乙の兄。  
甲と乙の兄とが来た。

(口) 上文を指示する場合 活用語の終止形に添ふ。

朝日昇ると思ふ間もなく……

運命も盡きぬと見えたり。

但し、連體形に添ふ習慣あるものは、それに従つても差支ない。

月出づると見えて……

嘲弄せらるゝと思ひて……

だに・すら・さへ

七 だに・すら・さへ

さへがとこゝろ

禽獸にだに若かず。

生死すら明らかならず。

道險しく、雨さへ降る。

右の例のやうに、だに・すらは、最も意味の軽いものを表面にあらはして、意味の重いものを言外に含ませ、さへは既にある上に更に加る意をあらはす。

口語では右の區別はなく、さへが一般に使はれる。

八 ばや・なむ

共に動詞助動詞の未然形に添ひ、願望の意をあらはす。

我も行かばや。

花も咲かなむ。

母に知らせばや。

ばや・なむ

ばや<sup>○</sup>は自分の希望をあらはし、なむは他に對する注文をあらはす。即ち右の例で、「行かばや」は「行きたいものだ」といふ意、「咲かなむ」は「咲いてほしいものだ」といふ意となる。

又「花も咲きなむ」のやうに連用形に添ふなむは、完了の助動詞ぬの未然形に、未來の助動詞むの添うたもので、助詞のなむとは違ふ。

や・か

九 や・か

(イ) 疑の意をあらはす場合 活用語に添ふ時、やは終止形に、かは連體形に添ふべきである。

果してその人なりや。

果してその人なるか。

但し、今はやも連體形に添ふことが多いが、それも差支ない。

父に似たるや、母に似たるや。

(ロ) 上に疑問の語の來る場合 下にかを使ふべきである。

五と三との和は幾何なるか。

これを如何にすべきか。

但し、今はかやうな場合にもやを使つても差支ない。

幾何なるや。如何にすべきや。

(ハ) 反語の意をあらはす場合

豈我のみならんや。

誰かは感激せざらん。

係結の法則



一〇 係結の法則

(イ) 谷川の水ぞ清き、

彼なむ行ける。

Handwritten notes and diagrams on the left page, including arrows and the characters 'や' and 'か'.

Handwritten notes at the top of the left page, including the characters 'や' and 'か'.

花や散れる。  
誰かある。  
(ロ) 水こそ清けれ。  
我こそ行かめ。

右の例のやうに文語では、ぞ、なむ、や、かが文の途中に来る時は、それに應ずる結は連體形となり、こそが文の途中に来る時は、それに應ずる結は已然形となる。この法則を係結の法則といふ。

但し、その文が接續の助詞によつて、下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に従ふ。



なさけある人とぞ聞ゆれば……

時鳥一聲とこそ思ひしが……

練習題

試験に出る

一次の文中から助詞を選び出し、特に傍線ある助詞の意味をい

- (1) 打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。
- (2) 淺緑すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。
- (3) 一人も残さず討取つて、此の度の賞に預らばや。
- (4) 波風やまねねば船出さず。
- (5) 雨は降りたるも風は吹かざりき。
- (6) 東風吹かば香おこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ。
- (7) 限ある世に限なきことを思ふべきかは。
- (8) 波風の靜かなる日も船人はかぢに心を許さざら

スガナ しんもりたあ  
3. 下ヤ 願望  
4. ね 打消りすり  
5. も 假定りもを逆  
6. 下 後不  
な 禁止  
か 反語

ク、ヤ、疑問

ハ、ハ、

(9) 主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。

二次の文の係結について述べよ。

- (1) 君をおきて誰をか頼むべき。
- (2) 煙たなびくとまやこそわがなつかしき住家なれ。
- (3) 村の社の掃除や終へし、はうき手にく、此方をさして、語り来る若き人々。
- (4) 我が身を捨てて報いんと、起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

自修題

試験

一次の文中から助詞を選び出し、全文を口語に譯せ。

- (1) 洗ひ清めんとする人の少きこそ心得ね。

あつ人さへ原れぼす  
われれむに

下ニあすう運来

- (2) その人かたちより心なんまさりたる。その人は形より心がまさる。
- (3) 彼だにあらば救はれしを、口惜しきことなりき。
- (4) 此の人なからましかば、日本の本國も如何になりなましとこそ覺えしか。
- (5) 山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心われあらめやも。
- (6) はや馬にておはしまさなむ。

二次の文中の誤を正し、其の理由をいへ。

- (1) をかしくとも笑ふべからず。
- (2) 富士の山こそ昔より名高し。
- (3) 友を訪ねて會はれざるぞ遺憾なれ。
- (4) さる事をばなしそ。
- (5) 明日雨降れば運動會を延期すべし。

接頭語

一 接頭語

單獨には使はれないで、他の語の上について熟語となる語を接頭語といふ。

う	ひ	陣	お	庭	す	足	ひ	が	目	ま	心	を	田
た	走	る	ほ	の	見	ゆ	い	や	増	す	さ	迷	ふ
け	高	し	な	ま	や	さ	し	も	の	寂	し	た	易
又													
う	ち	出	づ		さ	し	出	す		ひ	き	受	く
右	の	う	ち	さ	し	ひ	き	等	は	本	來	動	詞
て	接	頭	語	と	な	つ	た	も	の	で	あ	る	

右のうちさしひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

二 接尾語

單獨には使はれないで、他の語の下について熟語となる語を接尾語といふ。

子	ど	も	彼	ら	君	た	ち	奴	ば	ら	君	が	た
長	さ	嬉	し	さ	厚	み	重	げ					
春	め	く	黄	ば	む	嬉	し	が	る	上	品	ぶ	る
露	け	し	男	ら	し	馬	鹿	ら	し	隔	て	が	ま
夜	す	が	ら										

練習題

次の文中から接頭語・接尾語を選び出せ。

(1) 西北に當れる高地に兵を引きまとめたり。

- (2) 東國へ下る路すがら箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見たり。
- (3) 木の葉黄ばむ頃となれば、淋しざいはん方なし。
- (4) 將軍秀忠刀取りて障子を引きあくれば、御臺所燈火取りて出でらる。
- (5) 夕やみほの暗くせまりて、あたりいともの淋し。
- (6) 別れを告げて立去れり。
- (7) 雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。
- (8) 女子は女子らしく、振舞はざるべからず。
- (9) 議論がましきことな宣ひそ。
- (10) 何時の間にかいとど春めきて、木々の梢若芽萌出でたり。

第二章 品詞の轉成

品詞は他の品詞に轉じて使はれることがある。

一 轉成の名詞

一、動詞から轉じたもの

(イ) 連用形から 光 戦 氷 霞 帶 眺 笑

あゆみ 登り 降り 見積 手傳

(ロ) 終止形から 陽炎 角力 雫 茂(人名)

二、形容詞から轉じたもの

(イ) 連用形から 近くの家 遠くの村 早くより

遅くまで

(ロ) 終止形から あかし(燈火) 芥子 すし(鮓) 正(人名)

三、感動詞から轉じたもの

あはれ

四、形容詞の語幹に接尾語さ・み・けの添うたもの

深さ 樂しさ 重み 憎しみ 寒け

二 轉成の代名詞

名詞から轉じたもの

君 僕 わらは 殿下 閣下 お前(口)

三 轉成の動詞

一、名詞から轉じたもの

れうる(料理) ひとりごつ(獨言)

二、名詞を語幹とするもの

つなぐ(綱) またぐ(股) 影る

三、形容詞を語幹とするもの

惜しむ 悲しむ 樂しむ

四 轉成の形容詞

轉成の形容詞

轉成の助動詞

動詞の未然形を語幹とするもの

騒がし 勇まし 誇らし 狂はし やまし(疾)

五 轉成の助動詞

動詞から轉じたもの

たまふ おはします まします 奉る 候(文)

なさる 遊ばす いたす まうす(口)

六 轉成の副詞

一、名詞から轉じたもの

昔行けることあり。 つゆ知らず。

ゆめ覺えず。

二、動詞の連用形から轉じたもの

あまり早し。 たとへ死すとも。

轉成の副詞



はじめ困れり。

副詞には右の外、みだりに強ひて、残らず例へば等、他の品詞から合成されたるものが多い。

又形容詞の連用形はすべて副詞の働をする。

空青く澄む。子供ら楽しく遊ぶ。

形容詞の語幹から轉じた長々久々うすくなど口語で使はれる場合が多い。

轉成の接續詞

七 轉成の接續詞

一、名詞から轉じたもの

無事勉強致し居り候間御安心下され度候。

先方に交渉致し候處幸快諾を得申し候。

轉成の感動詞

八 轉成の感動詞

副詞から轉じたもの

いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。

なほ口語には次のやうなものがある。

一、代名詞から轉じたもの

これ、そんな事をしてはいかん。それ、又失敗した。

あれ、雪が降る。どれ、行かうか。

二、副詞から轉じたもの

さて困つた。いやはや、恐れ入りました。

轉成り接續詞

助動詞から轉じ

轉成り名詞

動詞から轉じ

轉成り名詞

形容詞、語幹に接尾語

たり、疎したもう

轉成り動詞

副詞から轉じ

轉成り名詞

動詞から轉じ

轉成り名詞

形容詞から轉じ

練習題

次の文中の轉成の品詞を選び出し、それを説明せよ。

- (1) 昨日その家へ行つてみました。が、どなたもをられませんでした。  
(口語)
- (2) 月の光が軒端を洩れて、畳の上を明かるく照らしてゐる。  
(口語)
- (3) 月夜の靜かさに酔ひ心地になる。  
(口語)
- (4) さて、目あきは不自由だ。  
(口語)
- (5) 向かふの山が霞に包まれて朧に見える。  
(口語)
- (6) 彼の秀でたる技は早くより認められたり。  
大 致
- (7) 君の恵は山より高く、父母の恩は海より深し。  
大 致
- (8) 兄より教を受け、よく其の教を守れり。  
大 致
- (9) ゆめ忘れ給ふこと勿れ。  
大 致

轉成り代名詞  
名詞から轉じた  
轉成り動詞  
動詞から轉じた  
ゆめ 名詞から轉じた

自修題

一次の文中傍線ある語の異同を述べよ。

- (1) 何事もなかりしか。  
りやあううか 推量
- (2) かくこそ出で入り給ひしか。  
カコ
- (3) 召されしかば参りぬ。  
シマシマ 指定 自らなりなりぬれ
- (4) 波靜かなり。  
シマシマ 指定 自らなりなりぬれ
- (5) 風となり雨となりぬ。  
シマシマ 指定 自らなりなりぬれ
- (6) かの山は富士山なり。  
シマシマ 指定 自らなりなりぬれ
- (7) 鳴く鶯の聲すなり。  
シマシマ 指定 自らなりなりぬれ
- (8) 兒等はいづくにか行きしはや歸らなむ。  
希望 程又
- (9) 夜は更けぬはや歸りなむ。  
未來 定又
- (10) 三とせすぎて、浦島は故郷に歸りけるとなむ。  
係結
- (11) 月に雲なたなびきそ。  
形止

- (5) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (6) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (7) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (8) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)

冬來りなば如何せまし。  
 水を賜へな。  
 威風堂々たり。  
 花散りたり。  
 孔子は聖人たり。  
 あなうれしのことや。  
 かしこに遊べることありや。  
 古池や蛙飛込む水の音。  
 さることもあらん。  
 雪も消ゆらん。  
 玉の光は添はざらん。  
 淋しき冬よ行きねかし。  
 早く往ね。

*冬來りなば如何せまし。 冬來りなば如何せまし。*  
*水を賜へな。 水を賜へな。*  
*威風堂々たり。 威風堂々たり。*  
*花散りたり。 花散りたり。*  
*孔子は聖人たり。 孔子は聖人たり。*  
*あなうれしのことや。 あなうれしのことや。*  
*かしこに遊べることありや。 かしこに遊べることありや。*  
*古池や蛙飛込む水の音。 古池や蛙飛込む水の音。*  
*さることもあらん。 さることもあらん。*  
*雪も消ゆらん。 雪も消ゆらん。*  
*玉の光は添はざらん。 玉の光は添はざらん。*  
*淋しき冬よ行きねかし。 淋しき冬よ行きねかし。*  
*早く往ね。 早く往ね。*

- (9) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (10) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (11) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)
- (12) (ハ) (イ) (ロ) (ハ) (イ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ) (イ) (ハ) (ロ)

姿こそ見えね。聲はまがふことなし。  
 紅葉すればや照りまさるらん。  
 人に見せばや。  
 昔紀貫之といふ歌人ありけり。  
 吉野の山の櫻咲けり。  
 我人に笑はる。  
 笑へる顔の愛らしさ。  
 亡き母のことのみ思はる。  
 父は畫を好まる。  
 東京より大阪まで。  
 義は泰山より重し。  
 酒は米より製す。

*姿こそ見えね。聲はまがふことなし。 姿こそ見えね。聲はまがふことなし。*  
*紅葉すればや照りまさるらん。 紅葉すればや照りまさるらん。*  
*人に見せばや。 人に見せばや。*  
*昔紀貫之といふ歌人ありけり。 昔紀貫之といふ歌人ありけり。*  
*吉野の山の櫻咲けり。 吉野の山の櫻咲けり。*  
*我人に笑はる。 我人に笑はる。*  
*笑へる顔の愛らしさ。 笑へる顔の愛らしさ。*  
*亡き母のことのみ思はる。 亡き母のことのみ思はる。*  
*父は畫を好まる。 父は畫を好まる。*  
*東京より大阪まで。 東京より大阪まで。*  
*義は泰山より重し。 義は泰山より重し。*  
*酒は米より製す。 酒は米より製す。*

二次の文を品詞に分け、活用語は特に其の活用をいへ。

- (1) 世界の海戦史上、最も赫々たる名聲を博するものは、英國の水師提督ネルソンなり。
- (2) 彼我の撃出す砲彈、恰も急雨の亂下するが如く、面を向くべくもあらざる中に、大將は從容として立でり。そゞるに膽藝の如き相模太郎の風姿を思ひ浮かべしむ。
- (3) 大阪より雨を冒して奈良に遊ぶ。汽車に乗りては風さへ加りて、窓をあくることもならねば、法隆寺など呼ぶ聲を空しく聞くのみなりき。
- (5) 天に一片の雲なき夕べ、逗子の海濱に立つて、伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。

第三篇 文章 篇

第一章 文の成分

一 主語・述語

- 一 花が 散る。(口語)
- 二 あなたは どなたですか。(口語)
- 三 月 清し。
- 四 波 静かなり。
- 五 彼も 行けり。

右の文に於て、花があなたは月波彼もは其の文の主體をなす語であるから、これを主語といひ、散るとなたですか清し静かなり。

主 述  
語 語

行けりは主語についてその動作状態性質等を述べる語であるから、これを述語といふ。

主語は普通體言から成り、文語では單獨にあらはれる場合と助詞はもが等を伴ふ場合とあるが、口語では必ず助詞を伴ふ。主語は又左の例のやうに體言に準ずる語から成ることもある。

述語

- 一 赤いのが 美しい。(口語)
- 二 過ぎたるは、及ばざるが如し。
- 三 勤勉なるは、いとよし。

述語は普通用言又は用言に助動詞助詞の添うたものから成る。但し、又左の例のやうに、體言又は體言に準ずる語に助動詞又は助詞の添うたものから成ることもある。

- 一 東京は 日本(口語)の首府です。

川三三

補語

あは

主語述語は文の主成分であつて、普通これが備らねば完全な文とはいへない。

二 補語

- 一 父が 花を 見てをられる。(口語)
- 二 水が 湯に なる。(口語)
- 三 あの方は 東京から 行かれました。(口語)
- 四 言はぬは 言ふに まさる。
- 五 彼は 寒きを いとはず。
- 六 中江藤樹は 俗稱を 與右衛門と いふ。

右の例に於て傍線を施した語は、各其の述語の目的をあらはし、



主語 述語 修飾語  
形動詞 形容詞 副詞 修飾語

修飾語

又は述語の意味を助けて其の働を完全にする。かやうな語を補語といふ。  
補語は體言又は體言に準ずる語から成り、必ず助詞をにと等を伴ふ。  
補語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と無くてもよい場合とある。

三 修飾語

一 美しい花が ちら／＼と散る。(口語)  
二 富士の山 皚々たる白雪を 戴く。  
三 鏡の如き月 鬱蒼たる森に 明か／＼かゝり。  
右の例に於て傍線を施した語は、各主語・述語又は補語を修飾してゐる語である。かやうな語を修飾語といふ。

形容詞的修飾語  
副詞的修飾語

修飾語の中、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といひ、用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語は、形容詞又は形容詞に準ずるものから成る。

形容

激しい雷が終日鳴りひびいた。(口語)

形動

静かな海を走る。(口語)

動

吹く風いと涼し。

行方も知らぬ旅に出立つ。

庭の櫻咲けり。

副詞的修飾語は副詞又は副詞に準ずるものから成る。

戦はます／＼烈しい。(口語) 副

清く澄んだ水を湛へてゐる。(口語) 形動 副

一羽の鳶悠然と飛ぶ。

形 副

人々泣く／＼立去れり。田舎言葉

主語・補語の修飾語は、直接其の上につくが、述語の修飾語の中の副詞的修飾語は、他語を隔てて修飾する場合がある。

一 突然 濃霧が一行を包んだ。(口語)

二 早くも 日の丸の旗、檣頭に翻りぬ。

三 彼は 深更まで 文を書續けたり。

右のやうな場合は、修飾語は其の下全部を修飾してゐるものである。

四 獨立語

一 花子や、お前どうしたの。(口語)

二 あはれ、今年も無爲に終りぬ。

三 雨はげしく、且、風強し。

右の例に於て傍線を施した語は、主語・述語・補語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かやうな語を獨立語といふ。

練習題

次の文の主語・述語・補語・修飾語・獨立語を示し、修飾語は其の種類と其の修飾する語とをいへ。

- (1) これ北八、お前これをかついでくれ。(口語)
- (2) 水兵は蜘蛛の子を散らすやうに八方に散つた。(口語)
- (3) われは、友をして事情を彼に告げしめたり。
- (4) 臣民たる者、片時も忠君の心を失ふべからず。
- (5) 熾なる火は濡れたる物を忽ち乾かす。
- (6) 國旗は實に國家を代表する標識なり。
- (7) 優美温雅なる山川は、常に我が國民に自然愛好の性情を育成せり。

第二章 文の成分の位置及び省略

正 常

一 正常の場合

一 清らかな水が さらくと流れる。(口語)

二 熱心なる聴衆は 廣き講堂に 潮の如く押寄せたり。

右の例で明らかかなやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一(修飾語)主語……(修飾語)述語。

二(修飾語)主語……(修飾語)補語……(修飾語)述語。

但し、述語の修飾語中の副詞的修飾語が、時に補語又は主語の上に来ることは、前章で説いた通りである。

倒 置

二 倒置の場合

省 略

三 省略の場合

(イ) 主語の省略

一(私は)昨夜は十一時に寝ました。(口語)

二(人々)此の處に塵芥棄つべからず。

(ロ) 述語の省略

一あなたのお宅は。(どちらですか。)(口語)

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に、文の成分の位置を變へたものである。

一何を あなたは 見てゐるのですか。(口語)

二荷物を持ちませう、私が。(口語)

三善いかな、言や。

四かゝる善言を 誰か信ぜざらん。



(ハ) 補語の省略

- 一 それは御不用ですか。では私に(それを)下さい。(口語)
- 二 神よ、願はくは(我に)幸あらしめたまへ。
- 三 祕訣あり。(それを)(汝に)授けん。

(ニ) 其の他一部分の省略

- 一 お前もおいで(なさい)。(口語)
  - 二 私はそんな事(を)は知りません。(口語)
  - 三 樂は苦の種(なり)、苦は樂の種(なり)。
- 右の例のやうに、文は冗長を避け、又は意味を強める爲に、其の成分を省略することがある。

練習題

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正常の位置におけ。

- (1) お、降つたはく。世に榮えてゐる人がながめたら、さぞ面白い事であらうが。(口語)
- (2) 「どちらへいらつしやいますか。」京城へ参ります。あなたは。(口語)
- (3) 昨日はどうしたのだ、君は。待つたよ、僕。(口語)
- (4) よき日は明けぬ、さわやかに。朝日は出でぬ、花やかに。
- (5) 言ふをやめよ、他郷苦辛多しと。いふをやめよ。
- (6) なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。
- (7) 料らざりき、今日君の葬に會はんとは。

clause  
70-72

第三章 節 *試験に用ゐる*

- 一 雪の降る景色は美しい。(口語)
  - 二 國旗の天空に翻つてゐる姿は勇ましい。(口語)
  - 三 鳥が花の咲いてゐる枝で鳴いてゐる。(口語)
  - 四 神戸港は海深し。
  - 五 花笑ひ、鳥歌ふ。
  - 六 風靜かにして、波穩やかなり。
  - 七 我は文學を好み、弟は理學を好む。
- 右の例のやうに、或文が全文の中に含まれてゐる場合、其の含まれてゐる文を節といふ。
- 右の一・二・三・四の例のやうに、節が全文中に從屬して其の成分を

節

從屬節

對立節

體言節

なす場合、これを從屬節といふ。

又右の五・六・七の例のやうに、節が各從屬關係をなすことなく、幾つかの節が對立的に相寄つて一文をなす時、それ等の節を對立節といふ。

從屬節の種類

一 體言節

- 一 價の高いのが 貴いわけてない。(口語)
- 二 鯉幟の天空にひるがへるのは 勇ましい。(口語)
- 三 我々は 時の移るを 知らざりき。
- 四 島は 雲の海上に浮かべるに 似たり。

右の例のやうに、體言に準じて文の主語・補語の働をする節を體言節といふ。

用言節

二 用言節

一 鶴は 首が長い。(口語)  
 〇 蟻は 性勤勉なり。  
 右の例のやうに、用言に準じて文の述語の働をする節を用言節といふ。

形容詞節

三 形容詞節

一 陽炎の燃える春の日は 來ました。(口語)  
 二 月明かき夜、舟を海上に浮かぶ。  
 三 生徒は 先生の職を退かるゝことを 悲しめり。  
 右の例のやうに、形容詞に準じて形容詞的修飾語となる節を形容詞節といふ。

副詞節

四 副詞節

一 子供らが 節面白く 歌つてゐる。(口語)  
 二 櫻の花 色美しく 咲けり。  
 三 波荒くとも、船は出帆せん。  
 右の例のやうに、副詞に準じて副詞的修飾語となる節を副詞節といふ。

練習題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

- (1) わたくしは、君が東京に行かうとは思はなかつた。(口語)
- (2) 父はいつも日の出ないうちに、起きます。(口語)
- (3) 雲のたなびいてゐるやうに見えるのは、櫻の花が爛漫と咲いてゐるのだ。(口語)

- (4) 我が國は風光が極めて明媚である。(口語) 用言節
- (5) 國語こそは國民の魂の宿る所である。(口語) 形容詞句節
- (6) めいゝが私の教を行ふ所に、私は永遠に生きてをる。(口語) 形容詞句節
- (7) 寒からぬ雪雲なき空より降る。 形容詞句節
- (8) 水清ければ底の眞砂も數へつべし。 副詞句節
- (9) 身は鐵石にあらざれば、砲丸に倒るゝ兵士の數知れず。 副詞句節
- (10) 旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催す。 副詞句節
- (11) 秋の風は泣き、冬の風は怒る。 副詞句節
- (12) 草茫々として、人跡全く絶えたり。 副詞句節

自修題

次の文中から節を選び出し、其の節の種類をいへ。

- (1) 私たちは、そこで夜があけるのを待ちました。(口語) 体言句節
- (2) 空の青く見えるのは、空氣の中を日光が透る爲である。(口語) 用言句節
- (3) 花を觀るのは春で、紅葉を眺めるのは秋だ。(口語) 副詞句節
- (4) 出雲の神社は規模の大なるを以て世に知らる。 副詞句節
- (5) 何れも重要ならざるはなけれど、中にも其の用途の廣きは杉及び檜なり。
- (6) 誰か徳高き人を敬はざらん。 副詞句節
- (7) 規模の雄大にして、建築の宏壯なる、實に天下に冠たり。
- (8) 箱根路をわがこえくれば、伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ。
- (9) 味よき魚は、荒海に住むとぞ。
- (10) 月明らかに、星稀に、烏鵲南に飛ぶ。

第四章 主部・述部・補部・敘述部

主部

一 主部

- 一 雲霞の如き大軍が 押寄せた。(口語)
- 二 飛行機の青空に群飛ぶは 壯快なり。
- 三 雨の降る夜は 淋し。

右の例のやうに、主語に修飾語が添ふ場合、又は主語が節から成り又は節を含む場合、「雲霞の如き大軍が」「飛行機の青空に群飛ぶは」「雨の降る夜は」といふ全體を主部といふ。

述部

二 述部

- 一 蓮の花が 涼しさうに咲出た。(口語)
- 二 我が父は 元氣頗る宜し。

補部

三 補部

- 一 健全なる精神は 健全なる身體に 宿る。(口語)
- 二 母親が 子供の泣くのを あやしてゐる。(口語)
- 三 磯邊の船、潮のさし來る時を 待てり。

右の例のやうに、補語に修飾語が添ふ場合、又は補語が節から成り又は節を含む場合、「健全なる身體に」「子供の泣くのを」「潮のさし來る時を」といふ全體を補部といふ。

敘述部

四 敘述部

主語又は主部に對して、補語又は補部と述語又は述部とを合はせて敘述部といふ。

練習題

次の文の主部述部補部敘述部を示せ。

- (1) 涼しい風がそよ／＼と吹いて來る。(口語)
- (2) 大小さまざまの馬が、廣い野原を、あちらこちらとかけまはつてゐる。(口語)
- (3) 黄金のやうな月が、東の山の端に、そのやはらかい姿を現した。(口語)
- (4) 新聞はその災害の意外に甚だしかりしを報せり。
- (5) 彼所の森こそ神の鎮ります所なれ。
- (6) わが聯合艦隊は威風堂々と入港せり。
- (7) 荒廢せる城址は、そゞろに詩人の心を動かす。

自修題

次の文の主部述部補部敘述部を示せ。

- (1) 山の裾があちらこちら白いのは、蕎麥の花であらう。(口語)
- (2) 日本の櫻は、其の色が極めてあつさりしてゐる。(口語)
- (3) 雪をいたゞいた富士が、淡くほのかに聳えてゐる。(口語)
- (4) 身をきるやうな寒い風が、破れた笠をひゆう／＼と吹く。(口語)
- (5) 伊豆の山々は、今や燦然たる朝日の光を浴びたり。
- (6) 花は風吹かずとも散りぬべし。
- (7) 華やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなりぬ。
- (8) 日本國民として生まれたる我等は、一日片時といへども忠君愛國の念を忘るべからず。

第五章 文の種類

單文

一 單文

- 一 花が 咲く。(口語)
- 二 美しき鳥 うれしげに啼く。
- 三 妹 毬をつく。

右の例のやうに、主語と述語との関係が一通りであつて、一文の中に節を含むことのない文を單文といふ。

- 一 紫式部と清少納言とは 平安時代の才女である。(口語)
- 二 私は 鉛筆とペンとノートとを 買ひました。(口語)
- 三 私は 行はうと思つたことを行ひ盡くし 語らうと思つたことを語り盡くした。(口語)

複文

二 複文

四 植物は 發育し、生長し、繁殖し、枯死す。  
 五 風俗 質朴にして、剛健なり。

右の例のやうに主語、述語、補語が幾つも重なつたり、又は補語に述語の添うたものが幾つもあることがあるが、主語と述語との関係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

- 一 月の明かるい夜は 散歩によい。(口語)
- 二 花の散るのは きれいです。(口語)
- 三 日本海は 波が荒い。(口語)
- 四 歲月は 水の流るゝが如く 過去る。
- 五 鮎は 瀬の早きを 喜ぶ。

重文

文主

六 天氣清朝なれども 波高し。

右の例のやうに、從屬節を含む文を複文といふ。

右の例の三のやうに、節が述部となつてゐる場合、「日本海は」といふ全文の主語は、特に文主といふ。

三 重文

一 松は青く、砂は白い。(口語)

二 姉は庭を掃き、妹は水を汲む。(口語)

三 風雨烈しく、道は暗く、提灯も消えたり。

右の例のやうに、對立節の相寄つて成る文を重文といふ。

練習題

次の文の種類をいひ、其の構造を説明せよ。

- (1) いつか夜も全く明けはなれて、月も星も光を朝日に譲つた。(口語)
- (2) 風の音も、水の音も、車馬の音も、人の足音も、全く消えはてた。(口語)
- (3) 村の人が野菜や炭や薪を馬や車に積んでゐる。(口語)
- (4) 天氣のよい日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。(口語)
- (5) 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出没する夜景も、亦一段の趣あり。
- (6) 東寺の塔は吾を迎へて立ち、鴨川の水は吾を待ちて歌ふ。
- (7) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。
- (8) 各國の國旗は、或は其の建國の歴史を暗示し、或は其の國民の理想信仰を表すものなり。

自修題

次の文の種類をいひ、其の構造を説明せよ。



- (1) 爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美である。(口語)
- (2) 銀杏が一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いた様に明かるい。(口語)
- (3) あるゝかと思ればなぎゆく海原の浪こそ人の世に似たりけれ。
- (4) 観光の外人は、我が風光の明媚なるを見て、世界の公園の稱の空しからざるを知れり。

女子新國文典 上級用終

附録 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。  
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。  
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ(七)ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。  
例 手習サス。  
周旋サス。  
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ。

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

構演セラル

モよほセラル

一サル

一丸

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」「ナドイ

フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」「ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九 てにをはノ「ハ」動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ連続スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連続スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一 てにをはノ「ト」モ「ノ」動詞・使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連続スル習

慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

一二 強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

てにをはノ「ト」動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。  
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限り最終  
ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎へ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「ト」モ「或」ハ「ド」モノ如ク用キルモ妨ナ  
シ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ附スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。





第二表

形容詞活用表

シク活用	ク活用	種類	文
樂し	高し	語	語
たのし	たか	語幹/語尾	未然
く	く	連用	連用
く	く	終止	終止
き	き	連體	連體
けれ	けれ	已然	已然
		命令	命令
シク活用	ク活用	種類	口
樂しい	高い	語	語
たのし	たか	語幹/語尾	未然
く	く	連用	連用
い	い	終止	終止
い	い	連體	連體
けれ	けれ	假定	假定
		命令	命令

形容動詞活用表

タリ活	ナリ活	カリ活	種類	文
堂々たり	静かなり	高かり (烈しかり)	語	語
堂々	静か	高し	語幹/語尾	未然
たら	なら	から	連用	連用
たり	なり	かり	終止	終止
たる	なる	かる	連體	連體
たれ	なれ		已然	已然
たれ	なれ	かれ	命令	命令
第二	第一	種類	口	語
静かです	静かだ	高い (烈しい)	語	語
静か	静か	高し	語幹/語尾	未然
でせ	だ	から	連用	連用
でし	だ	かつ	終止	終止
です	だ		連體	連體
	な		假定	假定
	なら		命令	命令



第三表

表別識用活詞動語文

下二段	上二段	四段	ラ變	ナ變	サ變	カ變	下一段	上一段
打消のずが五十音圖のエの段の音につく	打消のずが五十音圖のイの段の音につく	打消のずが五十音圖のアの段の音につく	有り 居り 侍り	死ぬ 往ぬ	す(爲) 他語にすがついたもの	く(來)	蹴る	射る 鑄る 著る <sup>+</sup> 似る 煮る 干る <sup>レ</sup> 見る(顧みる・惟みる・鑑みる) 試みる) 居る <sup>+</sup> 率ある

表別識遺名假詞動語文

ダ行	ザ行	ハ行	ヤ行	ワ行	ア行
右の外	混ず <sup>マ</sup> ……… サ變の語尾の濁るもの	右の外	老ゆ 悔ゆ 報ゆ……… 其の他の甘ゆ 嘶ゆ 癒ゆ等 終止形がゆとなるもの	植う 飢う 据う………	得 <sup>+</sup> 射る 鑄る……… 居る 率ある………
	下二段		上二段	下二段	上一段 下二段

表便音言用語文

撥音便	ウ音便	イ音便	種類
み び に	ひ く	ぎ き	音類
踏んで 飛んで 死んで	問うて	泳いで 咲いて	動
踏んだり 飛んだり 死んだり	問うたり	泳いだり 咲いたり	詞
	高うして	悲しいかな	形容詞





況比	定指	嘆咏	量推					望願	去過		了				
			まし	けむ	らむ	めり	べし		らし	まし		た			
如し	たり	なり	けり	なり	まし	けむ	らむ	めり	べし	らし	まし	た	けり	き	り
如く	たら	なら							べ	く	まし	た			
如く	たり	なり							く	く	まし	た			
如し	たり	なり	けり	なり	まし	けむ	らむ	めり	べし	らし	まし	た	けり	き	り
如き	たる	なる	ける	なる	まし	けむ	らむ	めり	べし	らし	まし	た	ける	し	る
	たれ	なれ	けれ	なれ	まし	けむ	らむ	めり	べし	らし	まし	た	けれ	しか	たれ
	たれ														
連體・助詞(が・の)	連體・助詞	連體・助詞	過去・同ジ	終止(ヲ變ハ)	過去・同ジ	過去・同ジ	終止(ヲ變ハ)	終止(ヲ變ハ)	連用	連用	連用	連用	連用	連用	連用
やうです	やうだ	です	だ		さうです	さうだ	まい	らしい	たがる	たい					た
やうでせ	やうだら	でせ	だら		さうでせ	さうだら			たがら						たら
やうでしに	やうだつ	でし	だつ		さうでし	さうだつ		らしく	たがり	たく					
やうです	やうだ	です	だ		さうです	さうだ	まい	らしい	たがる	いた					た
	やうな	な				さうな		らしい	たがる	いた					た
	やうなら	なら				さうなら			たがれ	いた					たら
連體・助詞(の)	連體・助詞	連體・助詞			連體・助詞	連體・助詞	終止・助詞	打消・同ジ	連用	連用					連用





文部省檢定濟

昭和二十一年一月二日 高等女子學校國語科

昭和二十二年五月三十一日印刷  
昭和二十二年六月四日發行  
昭和二十二年十月十三日訂正再版印刷  
昭和二十二年十月十八日訂正再版發行

女子新國文典

上級用

定價 金五拾八錢

著作權所有



著者

廣島高等師範學校附屬中學校

國語漢文研究會

代表者 清水治郎

發行者

京極喜太郎  
大阪府西區立賣堀南通三丁目二十一番地

發行所

東京市赤坂區新坂町六十八番地  
大阪府西區立賣堀南通三丁目四五番  
掘唇口座大阪八六〇四五番

京極書店

發賣所

大阪府東區北久太郎町四丁目

柳原書店

外埠通商章程

大清光緒二十一年正月二十二日

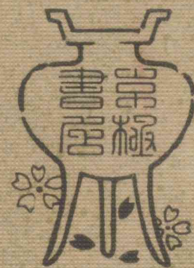
一、	凡在通商口岸	設立工廠	或製造各種貨物	均准其設廠	製造
二、	凡在通商口岸	設立銀行	或保險公司	均准其設廠	製造
三、	凡在通商口岸	設立洋行	或代理店	均准其設廠	製造
四、	凡在通商口岸	設立船塢	或修船廠	均准其設廠	製造
五、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造
六、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造
七、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造
八、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造
九、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造
十、	凡在通商口岸	設立碼頭	或倉庫	均准其設廠	製造

大清光緒二十一年正月二十二日

大清光緒二十一年正月二十二日

大清光緒二十一年正月二十二日

大清光緒二十一年正月二十二日



小野信叔

北川

広島大学図書

2000064972

